

## The 18th International Symposium and Book Fair on English Teaching:

### Internet- and Corpus-based English Instruction 報告書

尾関直子（明治大学国際日本学部）

2009年11月13日から11月15日まで台北で開催された The English Teachers' Association of the Republic China (ETA-ROC) に JACET 代表として参加した。大会は、13日からであったが、本務校の都合で、台北に到着したのは、11月13日の午後であり、大会には14日と15日参加することができた。

私の発表は、"The Effects of Psychological Factors on L2 Speech Performance"であり、これは、大和隆介氏（京都産業大学）と廣森友人氏（立命館大学）と科学研究費補助金を得て行っている研究、「発信力を高めるスピーキング授業モデルの構築」の途中経過についての発表である。この研究の概要について説明する。この研究は、話す前にプランニングをする時間があまりなく、話している間に何を話そうか考える余裕がないプレッシャーのかかる状況下での会話や質疑応答において、文レベル以上の発話ができ、なおかつ物事を解説できるようなスピーキング力を養成するには、どのような言語材料や要素が必要であるのかを調査する研究である。タスクを行う前にプランニングの時間を与えたり、タスクを行っている最中に十分な時間を与えると、スピーチ・プロダクションの「正確さ」、「流暢さ」、「複雑さ」になんらかの効果があることは実証されている。しかしながら、話す前にプランニングの時間がなく、プレッシャーのかかる状況下でのスピーチに関しては、ほとんど研究されていない。それを解明しようとするのがこの研究である。この研究は、3年に渡って行われており、pilot study から現在 study 3 まで調査が終わったところであるが、ETA-ROC では、study 2 までの結果を簡略化して発表した。pilot study では、大学生 15 人が、プランニングをする時間があまりなく、プレッシャーのかかる状況下でタスクを行い、その後、この 15 人に話している間にどのようなことを考えていたかについてインタビュー調査した。そのインタビュー結果をもとにスピーキングに与える要因を選びだし、質問紙を作成した。study 1 では、300 人の学生に質問紙調査を行い、スピーキングに与える言語的、認知的、情意的要因を測るための質問紙を完成させた。study 2 では、話す前にプランニングをする時間があまりなく、プレッシャーのかかる状況下でのタスクを 31 人の学生が行い、かれらのスピーチを正確さ、流暢さ、複雑さの 3 つの観点から分析した。また、タスクの直後に質問紙調査を行い、言語的、認知的、情意的要因がどのようにスピーチに影響を与えていたかについて調査した。

台湾で発表したものは、この研究の一部であるが、実験系の研究発表にも関わらず、

50人以上の人が発表を聞きに来てくれて（「普通は20人ぐらい入ればいい方なので、聴衆の数は期待しないでほしい」と前持って相川先生からお聞きしていたが）、用意していた30部のハンドアウトは完全に足りなくなった。また、研究結果に関する質問だけではなく、スピーチのAS-Unitの分析方法や正確さ、流暢さ、複雑さの測り方などの分析方法に関する熱心な質問を受けた。また、発表後も、実験方法について質問され、「自分たちもこのようなリサーチを試してみたいので資料を送付してもらいたい」と複数の方から要望された。このように、私たちの研究に興味を持ってくれたことに、研究者としてはとても誇りを感じたし、素直に嬉しかった。

私の発表後に質問をした5人のうち、2人は高校の先生であった。JACETの全国大会の発表では、JACETが「大学英語教育学会」という名前だけあり、圧倒的に大学の先生の学会員が多いので、当然のことながら、私はJACETの全国大会での発表において高校の先生から質問されたことがない。失礼ではあるが、質問してくれた台湾の高校の先生2人に「台湾では、高校の先生がこういう学会に来ることは普通ですか？」と率直にお聞きしたところ、学会に参加することは、教員研修の一環として認められているということであった。日本では、2007年6月の教育職員免許法の改正により、2009年4月1日より教員免許更新制が導入され、教員免許状を有効に保つためには、10年に一度、免許更新講習を受講し、修了することが必要となった。その目的は、教員として必要な「最新の知識・技能」を身に付けるためということだ。それが本当に目的ならば、あらためて大学などが開く講習に参加するより、このような学会に参加して、2日か3日間みっちり学会発表を聴けば、それこそ、最新の知識や技能が身に付くことになる。JACETも今後、全国大会の発表のレベルの高さなどを文部科学省にアピールをし、学会発表などを小・中・高の先生の研修に利用してもらえるようにし、国の政策の一環を担うような仕事をするとよいのではないかと考えた。もちろん、教員免許更新制は今年で終わりになりそうなので、新しい政府が教員の質の向上のための新しい政策を発表したら、なんらかの形で文部科学省にJACETをアピールする必要があると考えた。

もうひとつ、ETA-ROCの学会で素晴らしいと感じたことは、多くの大学院生が学会発表をしていることである。たとえば、私の発表の1つ前のセッションでは、Huang Yen-Zuさんが、「Reading Stories Aloud with Word Instruction in L1 or L2」という発表をしていた。この研究の結論を簡単にいえば、語彙学習は上級の学習者の場合、L2で行った方が、効果があるという結論である。先行研究についても詳しく調べてあり、研究方法も緻密で、素晴らしい発表であった。発表が終わった後、Huangさんが、とても若いので、博士課程の学生なのかと尋ねたところ、修士課程の学生であるという答えであった。修士課程のレ

ベル（少なくとも、私が修士課程の学生であったころのレベル）をはるかに上回る優れた発表であった。Huang Yen-Zu さんが所属している Taipei Municipal University of Education では、修士課程の学生の卒業条件に学会発表が含まれているということであった。日本の大学院の修士課程で学会発表を修士の卒業条件にしている修士課程は少ないのではないだろうか。修士課程の学生が学会発表することは、その学生の将来のためにもよいばかりでなく、指導教員もその指導に責任を持たなくてはいけなくなるので、日本でも是非積極的に修士の卒業条件に取り入れてほしいと感じた。

学会発表以外のディナーのことや他学会関係者と親睦を深めたことも是非書きたいが紙面が限られているので、また別の機会にお話ししたい。最後に、私を JACET 代表として選んでくださった JACET の関係者の皆様、ならびに国際交流委員会委員長で、この大会中いろいろご指導くださった相川真佐夫氏に、貴重な体験をさせていただいたことに心から感謝申し上げます。